

福島県喜多方市 灰塚山古墳第5次発掘調査報告

辻 秀人・佐藤 由浩・森 千可子
梅宮 崇成・鈴木 舞香・白銀沙也佳・石山 朋美・木村 智
小丸 雄大・野村 真吾・吉原 夏海

調 査 体 制

- 調 査 期 間** 平成 27 年 8 月 4 日～8 月 25 日、9 月 1 日～9 月 4 日
- 調 査 主 体** 東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
- 調 査 員** 佐藤由浩・森千可子（大学院博士課程前期 1 年）
村木 翔・相川ひとみ・野呂夕奈・阿部悠大・泉澤まい・笠原大暉
鈴木里奈・星あゆみ（4 年生）
梅宮崇成・鈴木舞香・白銀沙也佳・石山朋美・木村 智・小丸雄大
野村真吾・吉原夏海（3 年生）
- 調査参加者** 阿部友哉・上野圭太・岡本莉奈・齋藤千晶・佐伯鉄太郎・酒井 瞳
玉木 睦・結城 智・横山 舞（2 年生）
高橋伶奈（1 年生）
- 調 査 協 力** 喜多方市教育委員会
片岡 洋・植村泰徳（喜多方市教育委員会）山中雄志（喜多方市）
上野正典（新宮区区長）・後藤直人・田部文市・渡辺和男・
近 輝夫・近ノリ子（敬称略）
- 土地所有者** 新宮区



写真 1 灰塚山古墳後円部墳頂調査風景

例 言

- 1、 本書は平成27年8月5日～8月25日、9月1日～4日実施した福島県喜多方市灰塚山古墳第5次発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2、 調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施した。
- 3、 調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は東北学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程学生、東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属学生を中心とする学生、考古学実習Ⅰを履修する学生及び参加を希望した歴史学科1年生である。
- 4、 出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の3年生が中心となって実施した。
- 5、 本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆者の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、 本書の掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示す。
- 7、 灰塚山古墳は、これまでに福島県立博物館による測量調査、東北学院大学辻ゼミナールによる1～4次調査が実施されている。これまでに公表されている調査報告は以下の通りである。

公表された報告書

福島県立博物館 1987年「灰塚山古墳」『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第16集

辻 秀人他 2012年「福島県喜多方市灰塚山古墳第1次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第48号

辻 秀人他 2013年「福島県喜多方市灰塚山古墳第2次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第49号

辻 秀人他 2014年「福島県喜多方市灰塚山古墳第3次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第52号

辻 秀人他 2015年「福島県喜多方市灰塚山古墳第4次発掘調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号

序章 調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県会津地方に多く古墳が分布することはこれまでによく知られてきた。中でも会津盆地東南部の一箕古墳群、東北部の雄国山例麓古墳群、西部の宇内青津古墳群は前期の首長墓の系譜を3代以上にわたってたどることができる、有力な古墳群である。(辻 2006)。調査の対象とした喜多方市灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最も北に位置する前方後円墳である。

灰塚山古墳はこれまで、福島県立博物館によって測量調査が実施され(福島県立博物館 1987)、全長 60 m を超える大型前方後円墳であることが判明している。宇内青津古墳群では亀ヶ森古墳に次ぎ2番目の規模である。古墳の形態も宇内青津古墳群の中ではやや異質であり、最北を占める位置もあってその内容が注目されてきた。ただ、出土遺物が知られておらず、所属時期等についての手がかりがなく、古墳の範囲も測量段階では必ずしも明確にはされていなかった。

これまでに実施した第1～3次調査では、前方部、くびれ部の墳丘構造がほぼ明らかになり、後円部墳頂にある方形の塚状遺構が礫石経塚であることが判明した。第4次調査では、礫石経塚の全体像を理解し、さらに後円部墳頂平坦面を精査した結果、墓壙と陥没坑を検出することができた。今回の第5次調査は、第4次調査で検出した墓壙と陥没坑を掘り下げて埋葬施設を検出するとともに、墓壙内東側で確認されていた小礫集中部下層に広がる粘土の性格解明を目的として実施した。

調査は7年間継続する予定で今回は第5回目にあたる。

引用文献

- 福島県立博物館 1987年 「灰塚山古墳」『古墳測量調査報告』福島県博物館調査報告第16集
辻 秀人 2006年 『東北古墳研究の原点 会津大塚山古墳』新泉社

第1章 古墳の立地

第1節 古墳と周辺の地形

灰塚山古墳は喜多方市慶徳町新宮字小山腰 2908-1 に所在する。会津盆地の西側を画する越後山地の東側の縁辺にあたる丘陵上に所在する。会津盆地の平坦地と西側山地との境界にある。丘陵末端部で、周囲を解析された独立丘陵の頂上部分に古墳が築かれている。丘陵を構成する土は七折坂層で、河川の堆積物である砂層、礫を主体とし、火砕流堆積物も含まれる。七折坂層は断層が至近距離にあるため、層位が傾斜している（註1）。

第2節 歴史的環境

灰塚山古墳は会津盆地西部に分布する宇内青津古墳群中の北端に位置する大型前方後円墳である。宇内青津古墳群を構成する主な古墳は前方後円墳12基、前方後円墳3基で会津盆地の平野部から西側丘陵上まで広く分布している。最古段階は会津坂下町杵ガ森古墳、臼ガ森古墳で、古墳時代前期でも古い段階にあたる。福島県最大の前方後円墳である亀ヶ森古墳とその横に並ぶ前方後方墳、鎮守森古墳及び出崎山3号墳、7号墳が前期古墳と考えられている。中期、後期になると古墳は減少し、わずかに長井前ノ山古墳が中期、鍛冶山4号墳が後期と考えられている。天神免古墳は前期または中期で所属時期が確定していない。

ところで、近年喜多方市古屋敷遺跡が発掘調査の結果、中期後半の豪族居館であることが判明し、国の史跡に指定された。古屋敷遺跡に拠点をおいた首長の墓は宇内青津古墳群中にあるのが自然である。現在その候補として古屋敷遺跡に近い天神免古墳、虚空蔵森古墳、灰塚山古墳が挙げられているが、今のところ古屋敷遺跡と対応する古墳は確定していない。

灰塚山古墳の立地する独立丘陵は、国指定史跡新宮城跡と接し、すぐ西側にあたる。新宮城跡は中世の城館跡であり、中心部分はよくその本来の姿をとどめている。その中心は14世紀にあり、15世紀まで存在したと考えられている。灰塚山古墳は新宮城から西側を見た時に、最も近い丘として目に入る位置にある。灰塚山古墳の位置に新宮氏の墓所が想定されており、中世においての何らかの意味をもち、使われた可能性もある。

註1 福島県立博物館竹谷陽二郎氏のご教示による。



写真2 灰塚山古墳航空写真（西から撮影） 喜多方市教育委員会提供



写真3 国史跡新宮城跡と灰塚山古墳の位置関係（東から撮影） 喜多方市教育委員会提供



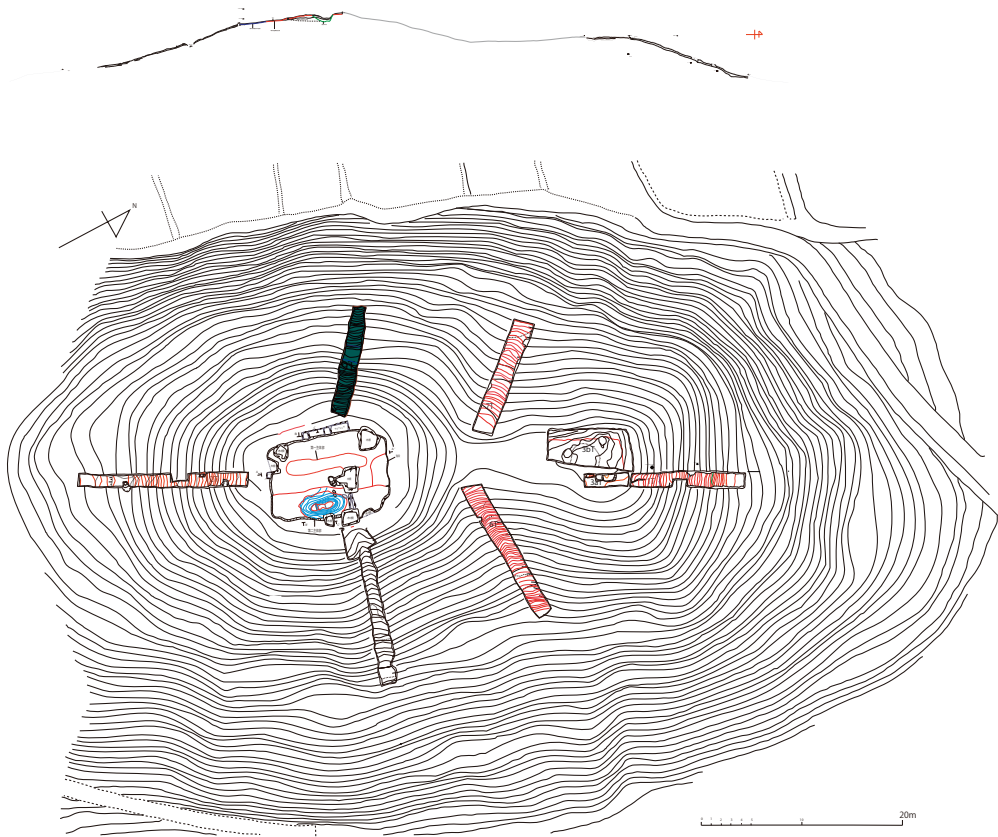
第1図 宇内青津古墳群分布図

第2章 発掘調査成果

1 これまでの調査成果

第1～2次調査では墳丘の形、構造を確認するためのトレンチを設定し、墳丘の概要を把握できた。前方部墳端から後円部墳端まで全長 61.2 m 後円部直径 33.2 m、前方部長さ 27.6 m の大型前方後円墳である。墳丘は下半部が地山を削りだして形成され、上半部は地山由来の土を積んで構築している。くびれ部はゆるやかに湾曲しており、前方後方墳の可能性は少ないと考えられた。墳丘は南北に延びる独立丘陵を整形し、その上に盛土をすることで形成されている。墳丘築造の方法は前期古墳に共通するものである。墳丘形態の特徴は、一般的な東北地方の同期の古墳に比べて前方部が高い点にある。

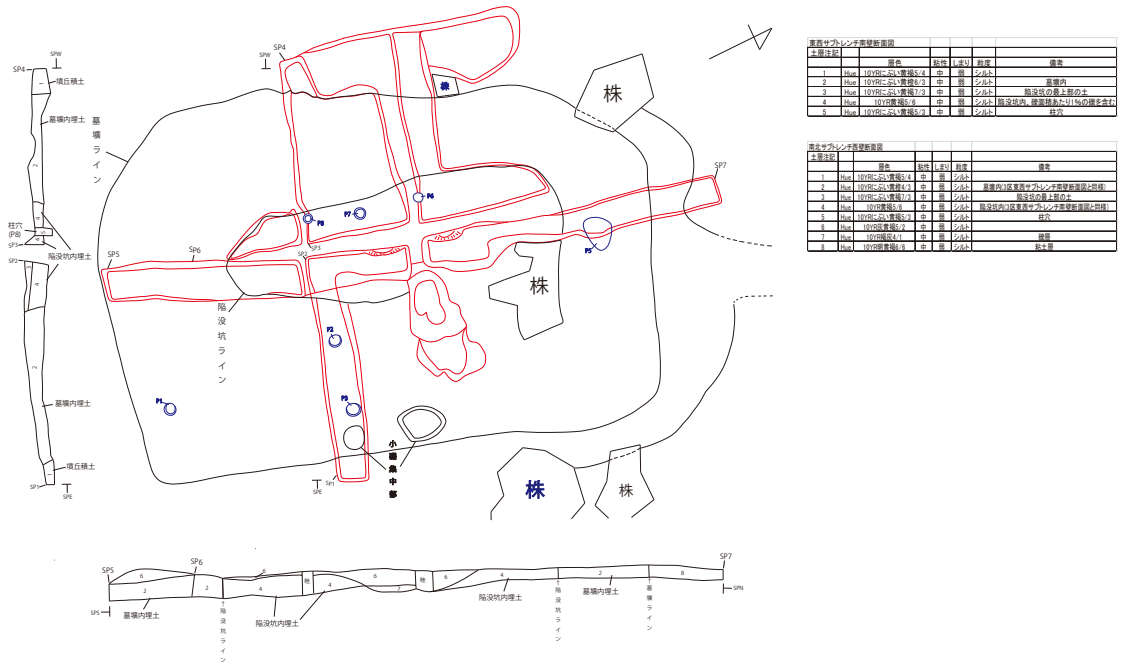
第3～4次調査では墳頂平坦面上に築かれた塚状遺構が江戸期の礫石経塚であることが判明した。古墳の上層遺構として調査を実施、掘りあげて、江戸期の礫石経塚の状況を明らかにすることができた。



第2図 灰塚山古墳トレンチ配置図

2. 墓壇内の調査

昨年度の調査では、礫石経塚を調査終了後除去し、墳頂平坦面の精査を実施した。その結果、ほぼ墳頂平坦面いっばいに掘られた墓壇と埋葬部に至ると見られる陥没坑を検出した。今年度は昨年度の成果を受けて墓壇及び陥没坑を掘り下げ、埋葬施設を検出することを目的として調査を実施した。



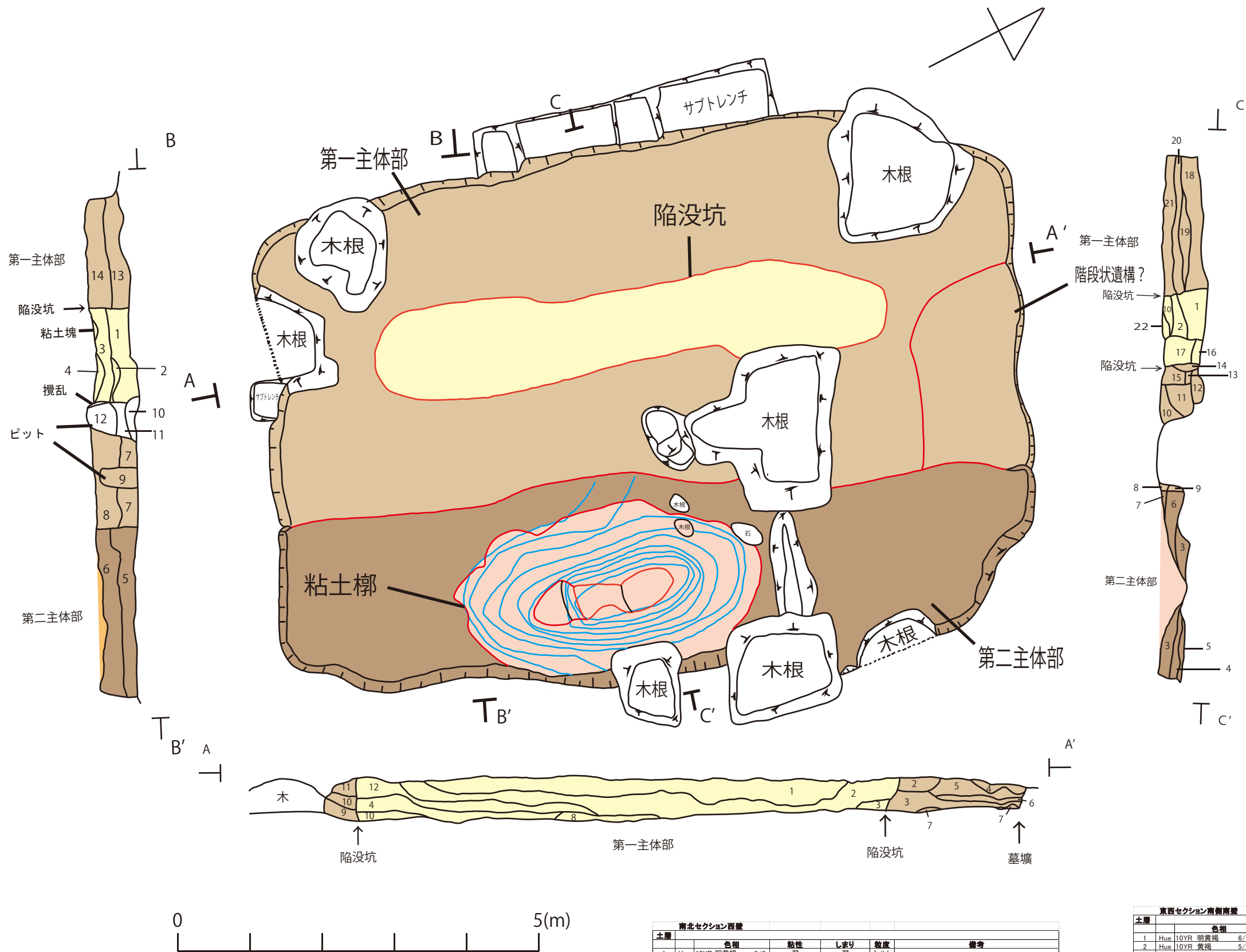
第3図 第4次調査で検出した墓壇と陥没坑

第4次調査で土層観察用に残したアゼを取り払い、再度精査をするとともに墓壇内の埋土を掘り下げたところ、墓壇西、北、南側では平面で確認した位置で墓壇壁が確認できた。墓壇東側では、平面で確認された線は墓壇埋土の違いを墓壇壁と見誤ったもので、これまでの理解よりもやや東よりに墓壇壁が確認できた。

墓壇やや西寄りで古墳主軸方向と平行する陥没坑は、掘り下げるにつれて幅が狭くなっていき、ほぼ想定される棺の形、大きさに近づいていった。掘り下げるにつれて埋土中に白色粘土が顕著に増えていき、粘土槨の天井部分は崩れた状態である可能性が出てきたため、掘り下げを停止した。

墓壇東側で部分的に確認されていた小礫に覆われた粘土は、墓壇埋土を掘り下げるにつれて広がりを見せ、最終的には長楕円形であることが判明した。形状からみて埋葬施設に関わる遺構であると判断し、粘土内の調査は第6次調査に委ねることとした。

墓壇内を最終的に精査したところ、墓壇西側と墓壇東側には埋土の違いがあり、斬り合



第 4 図 第 4 トレンチ全体図

南北セクション西壁						
土層	色相		粘性	しまり	粒度	備考
1	Hue	10YR 明黄褐 6/6	弱	弱	シルト	
2	Hue	10YR 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	
3	Hue	10YR 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	
4	Hue	10YR にぶい黄褐 5/4	弱	弱	シルト	10YR浅黄橙8/3・7.5YR明褐5/8が混じる
5	Hue	10YR 明黄褐 6/6	弱	弱	シルト	
6	Hue	2.5Y 黄褐 5/3	弱	弱	シルト	礫混じり
7	Hue	10YR 褐 4/6	弱(中に近い)	弱(中に近い)	シルト	7ベースにHue10YR明黄褐6/8でサンド
8	Hue	7.5YR 明褐 5/6	中	中	シルト	
9	Hue	2.5Y 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	
10	Hue	7.5YR にぶい褐 5/4	弱	弱	シルト	
11	Hue	10YR 褐 4/4	弱	弱	シルト	
12	Hue	10YR 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	2に比べてしまりが弱い

東西セクション南側南壁						
土層	色相		粘性	しまり	粒度	備考
1	Hue	10YR 明黄褐 6/6	弱	弱	シルト	
2	Hue	10YR 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	3に比べてしまりが弱い
3	Hue	10YR 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	
4	Hue	10YR にぶい黄褐 5/4	弱	弱	シルト	
5	Hue	7.5YR 明褐 5/6	弱	弱	シルト	
6	Hue	7.5YR 褐 4/6	弱	弱	シルト	粘土粒をまばらに含む
7	Hue	7.5YR 明褐 5/6	中	中	シルト	
8	Hue	7.5YR 褐 4/6	弱	弱	シルト	粘土粒をまばらに含む
9	Hue	7.5YR にぶい黄褐 5/6	弱	弱	シルト	
10	Hue	7.5YR 橙 6/6	弱	強	シルト	砂利をまばらに含む
11	Hue	7.5YR 橙 6/6	中	強	シルト	
12	Hue	7.5YR 暗褐 3/4	弱	弱	シルト	
13	Hue	10YR 褐 4/4	弱	弱	シルト	
14	Hue	10YR 黄褐 5/8	弱	中	シルト	

東西セクション北側南壁						
土層	色相		粘性	しまり	粒度	備考
1	Hue	10YR 明黄褐 6/6	弱	弱	シルト	陥没坑内
2	Hue	10YR 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	陥没坑内
3	Hue	10YR にぶい黄褐 5/4	弱	弱	シルト	
4	Hue	10YR にぶい黄褐 4/3	弱	弱	シルト	
5	Hue	10YR 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	
6	Hue	2.5Y 黄褐 5/3	弱	弱	シルト	
7	Hue	2.5Y 黄褐 4/5	弱	弱	シルト	
8	Hue	10YR にぶい黄褐 4/3	弱	中	シルト	
9	Hue	2.5Y 黄褐 5/3	弱	弱	シルト	6よりしまりが弱い
10	Hue	10YR 褐 4/4	弱	弱	シルト	
11	Hue	7.5YR 橙 6/8	弱	弱	シルト	
12	Hue	7.5YR 褐 4/3	弱	弱	シルト	
13	Hue	10YR にぶい黄褐 6/4	弱	弱	シルト	
14	Hue	10YR 暗褐 3/3	弱	弱	シルト	
15	Hue	10YR 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	
16	Hue	2.5Y オリーブ褐 4/3	弱	弱	シルト	
17	Hue	10YR 明黄褐 6/6	中	弱	シルト	
18	Hue	10YR にぶい黄褐 6/4	弱	弱	シルト	
19	Hue	10YR にぶい黄褐 6/3	弱	弱	シルト	
20	Hue	2.5Y 黄褐 5/6	弱	弱	シルト	
21	Hue	2.5Y 黄褐 5/4	弱	弱	シルト	
22	Hue	7.5YR 明褐 5/6	中	中	シルト	

い関係にあると判断した。西側は陥没坑下の棺に伴う墓壙、東側は粘土による構築物に関わる墓壙であると考えられた。

墓壙内の掘り下げの結果、灰塚山古墳の後円部墳頂平坦面にはそれぞれの墓壙内に埋置された2基の埋葬施設があると考えられた。以下、西側を第1主体部、東側を第2主体部と呼び、それぞれについて記載したい。



写真4 墓壙掘り下げ状況（左陥没坑第1主体部、右粘土槨第2主体部）

(1) 第1主体部、陥没坑の調査

前年度の調査では、礫石経塚完掘に伴い墳頂平坦面全体を精査し、土色の違いを確認するとともに墳頂平坦面外周を巡る不正な長方形の墓壙、墳頂平坦面中央付近の木棺腐朽に伴い生じたと考えられる陥没坑を確認した。

今年度は、墳頂平坦面全体の精査を終えた後、前年度調査で認識した墓壙、陥没坑と思われる部分の土質の違いを再確認し、土色の変化の広がりをおいかけながら埋葬部の様相を明らかにすべく掘り下げを行なった。掘り下げた段階で前回までで確認されていた墓壙ラインを再度精査したところ、北、西、南は前回の平面形を再確認したが、東側は第2主体部に伴う墓壙により壊されていることが判明した（第4、5図）。墓壙は墳頂平坦面の中央よりやや西側にあり、南北約10.5mを測る。東西の幅は分からないが、陥没坑との位置関係から見て東側は第2主体部墓壙西側と近い位置にあったものと推定される。

陥没坑の規模は南北7.3m、東西1.5mの細長い楕円形である。検出された面から40cm

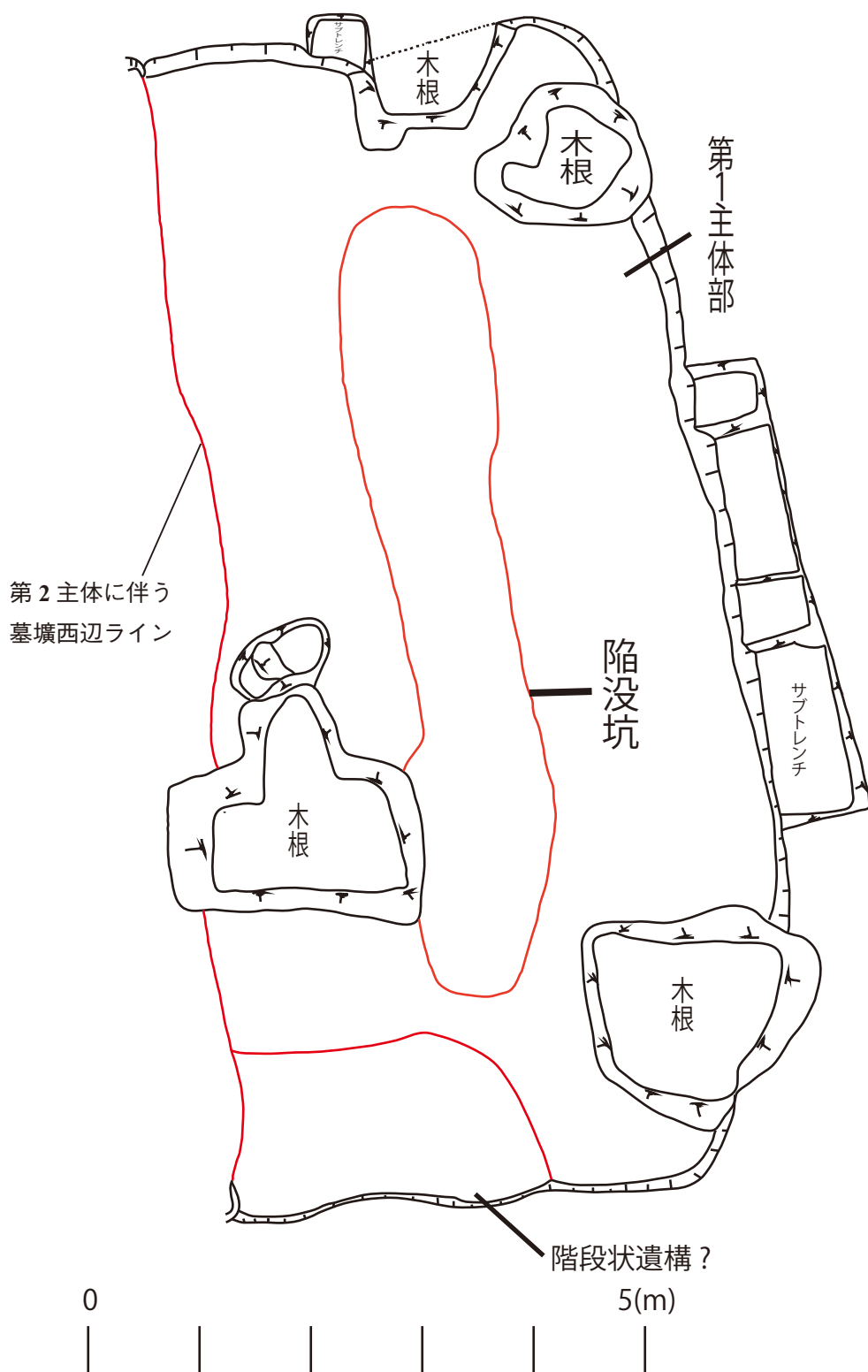
ほど掘り下げを行なったところ、陥没坑内の特に西側部分で白色粘土の量が急激に増えたため、主体部が粘土槨であった場合、粘土槨の天井部の崩落部分にあたる可能性を考え、掘り下げを停止した。第1主体部は粘土槨である可能性はきわめて高く、掘り下げを停止した面はほぼ粘土槨上面に達していると判断した。粘土槨は古墳主軸上に設置されており、その規模から見ても本古墳の主たる埋葬施設と考えられる。また、墓壙の北側に土色の違いがみられ、墓道または階段状遺構であった可能性が考えられ、さらなる精査が必要である。

今回、粘土槨、棺の上面と思われる土まで掘り下げを行なうことが出来た。しかし、棺内部の様相までは明らかにすることができず、来年度調査ではその内容を明らかにしたい。

(吉原夏海)



写真5 第1主体部調査風景



第5図 第1主体部平面図



写真6 第1主体部陥没坑全体写真



写真7 第1主体部陥没坑検出状況

(2) 第2主体部・粘土槨の調査

前年度の調査で墓壙東側に小礫集中部分があり、その下に赤みをおびた粘土質の土が検出されていた。この粘土は墓壙埋土の下層にあたるため（写真8、11）、墓壙埋土を掘り下げていったところ、長楕円形を呈し、舟底形の粘土の高まりであることが判明した。南北4m、東西2m高さ80cmを測る。粘土の上面は長さ2cm前後の小礫で覆われている。粘土の多くの部分は赤褐色をしているが、これは水分が透過する際に鉄分が残された結果で、本来は白色粘土であったと見られる。粘土の上部は比較的硬くてシルトに近く、下部は軟質で粘性が強い。この高まりの上半部は急傾斜で、舟底に近い形の部分は硬い粘土、下部の傾斜が緩い部分は軟質の粘土で構成され、両者は使い分けられているようである。

この粘土の高まりは、墓壙内にあること、舟底状の形状、粘土の使い分けなどから見て、小型ではあるけれど、粘土槨である可能性が高いと考えられた。もし、粘土槨であるとすれば、つぶれておらず、構築時の状態をそのまま保っていると思われる。

前回調査で墓壙は一つと見られたが、今回の掘り下げ後の精査で墓壙は東西の二つがあることが判明した。第2主体部の墓壙は東側で細長く、南北10.5m、東西3mを測る。土層観察から東側墓壙は西側墓壙よりも新しいと判断された。

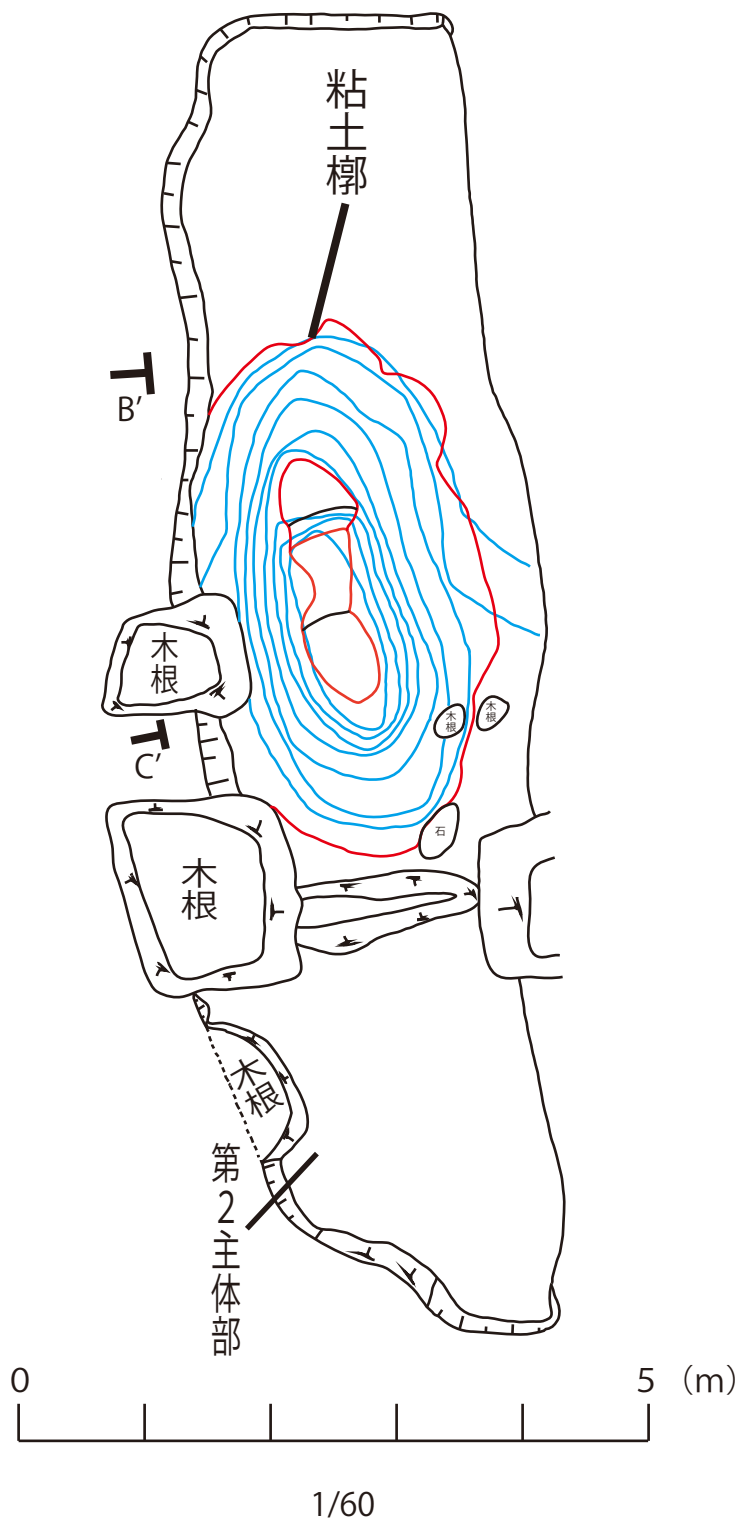
墓壙東壁付近の埋め土から土師器破片が10数点出土した。小破片で形が判明するものがなく、図化できなかったが、いずれも薄手で入念に調整されており、塩釜式である可能性が考えられた。

今年度の調査では第2主体部の全体像を確認した。来年度調査では第2主体部の内部の様相を明らかにしていきたい。

(石山朋美)



写真8 検出途中の第2主体部



第6図 第2主体部平面図



写真9 第2主体部全体図（南から撮影）



写真10 第2主体部全体図（西から撮影）



写真11 墓壙埋土と粘土槨の層位

第3章 ま と め

今年度の第5次調査では、第4次調査で墓壙、陥没坑を検出したことを受けて、墓壙内の埋め土を掘り下げ、埋葬施設の探索を行った。

調査の結果、墳頂平坦面に新旧2時期にわたる埋葬施設が確認され、第1主体部、第2主体部と名付けた。

第1主体部は古墳主軸に方向をそろえた墓壙と陥没坑である。陥没坑は、埋土と形状から見て、粘土槨の可能性が高く、木棺痕跡であると判断された。陥没坑の埋土と形状から見てほぼ粘土槨天井部分近くまで掘り下げている。木棺の長さは約7m前後と推定され、割竹形木棺または舟形木棺を想定している。陥没坑の位置がほぼ古墳主軸上にあたり、墓壙も墳頂平坦面の中心部分を占めていることから、灰塚山古墳の主たる埋葬施設は第1主体部であると考えられる。

墓壙東端に粘土があることは認識していたが、第2主体部の存在は調査前には想定していなかった。墓壙を掘り下げ、粘土の広がり追求した結果、底を上にした舟底状の姿であることが判明した。その性格を確定するためには来年度の調査をまたなければならないが、現段階では小型の粘土槨である可能性を考えている。墓壙内の精査に伴い、粘土槨に伴う長方形の墓壙があることが判明し、第2主体は墓壙内に埋置された小型の粘土槨と見られる。粘土槨とすれば、天井部が崩落していない状態であり、きわめて珍しく、東北地方では初例となる。第2主体の墓壙は第1主体の墓壙をわずかに切ってほられており、新しい時期と判断された。ただし、墳丘平坦面東側は第1主体部が構築された段階でもややせまいけれど第2主体を構築するスペースが残されており、第2主体の埋葬はあらかじめ予定されていたと考えられる。

これまでのところ、灰塚山古墳の築造時期を明確に示す遺物は出土しておらず、確定できない。ただし、第2主体部墓壙から出土した土師器破片は小片で確定はできないものの塩釜式である可能性があること、第1主体で想定される長大な木棺と粘土槨、第2主体の粘土槨などから見て、古墳時代前期である可能性が高いと考えられる。

東北地方で2時期に及ぶ埋葬施設が確認された古墳は著名な会津大塚山古墳が知られているだけであり、灰塚山古墳で想定された2時期にわたる粘土槨の確認例はない。来年度の調査では二つの埋葬施設の様相を解明するために調査を進めたい。

謝 辞

調査の実施にあたり、土地を所有されている新宮区長さんをはじめとする新宮区の皆様、調査に全面的にご協力いただいた喜多方市教育委員会、宿舎を提供いただいた近様ご夫妻に心から感謝の意を表します。